

■教育講演

ゆれる社会の不安と空気に向き合う

上田 紀行

(東京工業大学教授)

(早川) 先だって、上田先生のご著書『スリランカの悪魔祓い』(1990, 徳間書店; 2010, 講談社文庫) をいただきました。この本の中で紹介されているコミュニティでは、情緒不安定・ひきこもりなどの人がいると悪魔祓いが出てきておまじないをしたり、周りの人たちが集まって、結局最後は子どもから老人までわいわいと朝まで飲み食いしたりしているうちに、当人が元気になる。これは私が普段やっている精神衛生の活動にとっても近いなと思いました。

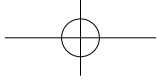
それでは、上田先生のご紹介をさせていただきます。1958年に東京でお生まれになり、東京大学大学院を修了されました。現在は東京工業大学リベラルアーツセンター教授でいらっしゃいます。上田先生、よろしくお願いいたします。

(上田) 今回の大会以前にも、2009年の日本精神衛生学会第25回大会のシンポジウムで、エッセイストの岸本葉子さんと東大教育学研究科の下山先生と一緒にシンポジストとして参加させていただきました。その際も早川先生が司会をされていました。演題は「心を豊かにする関係性」で、大会長の鉦鹿先生、そして司会の早川先生の素晴らしい進行のもと、シンポジウムは非常に盛り上がりました。この学会は素晴らしい学会だなと思いました。なお素晴らしいと思ったのは、その後の懇親会に参加させていただいたとき、高塚先生が(理事長としての)スピーチで「今日のシンポジウムははっきりいって物足りない。私がこの日本精神衛生学会に期待し

ているようなものは出なかった。非常に底が浅いものであった」とぼっさり切り捨てられたことです。相当びっくりしたのとともに、爽快な感じがありました。たいていの学会の懇親会でのスピーチは、大会長を褒めて、実行委員長を称え、岸本さんや私のような学会の外部の人を呼んでいる際は「今日は大変有益なお話をうかがえ、我々精神衛生に携わるものにとって非常に示唆に富む内容で、これから考えていきたい」と褒めて、ゲストや大会長の顔を立てるものです。それを「期待していたものが出なかった、底の浅いものだった」と切り捨てる理事長(当時)をもつこの学会は素晴らしい。いや、褒めているんです。ということが、今日の私の講演を最後まで聞いていただければご理解いただけると思います。鉦鹿先生、早川先生、岸本さん、下山先生そして私は少なからず心の傷を負い、それがきっかけで何度か飲みに行ったりして、傷つけられた者同士で助け合いながら仲良しになりました。苦しみが共同性を生み出す。その苦しみとなる痛手を与えてくださる方がいる、だからこの学会は素晴らしい、ということです。

I 何がゆらいでいるのか——社会システム・心・日本の国家イメージ

先ほどのシンポジウムの、最後のディスカッションの部分聞かせていただきましたが、一つ一つの発言がぐぐっと胸にくるものでした。私は東日本大震災や福島第一原子力発電所の事故に大きなショックを受け、原発事故が起きた



後の（日本の）対応に一層ショックを受けました。みんなで頑張ろう・頑張ろう、絆・絆と言うけれど、どういう絆が我々を幸せにしているのか。どういう絆があったから原発事故が起きてしまったのかを全く反省することなく、絆・絆と言っている。事故が起こった直後であるにもかかわらず、原発再稼働のための公開の説明会に職員や下請け企業の社員を動員してやらせ発言をさせるのも一種の絆です。そうした利益優先の絆を優先させて、もう一方の人間的な絆を優先しなかったからこういう事態が起こったのです。それを反省しないままに絆・絆と言っていればいいんだというのであれば、また原発事故が起こるような絆が作られる危険性がある。そうした反省（認識）もなく絆・絆・絆と言っている。これはどうなんだ、と頭にきて書いたのが、震災と原発事故の3カ月後に出版した『慈悲の怒り―震災後を生きる心のマネジメント』（2011、朝日新聞出版）です。この本に書いていることと本日の講演の内容は大きな関連があります。

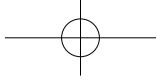
早川先生から講演の表題はこの本の表題でいったらどうかと提案がありましたが、「慈悲の怒り」だと、ちょっと、みんな来る気がなくなりますよね。なんか（講師に聴衆が）怒られるんじゃないかなーと思えて。しかしそうではなく、今日の講演の裏テーマは「精神衛生に関わる人は怒りあるいは憤りというものをどのように考えるのか」です。

私自身、震災のとき0歳児の双子の子どもと保育園卒園直前の長女の3人の娘がおりました。また末期がんの母の在宅看護をしていました。双子のうちの1人は何カ月もICUに入っていて、何度も命の危機にあいながらなんとか一般病棟に移って、3月前にやっと家に帰ってきたところでした。弱っている人間が家庭内にいる状態で、東日本大震災が起こりました。インターネットなどの情報を見ると相当量の放射性物質が出ているのに、政府は何も言わず何もしない。私自身は原発直後に家中の吸気口を目張りして防衛し、その後娘と妻は愛媛の実家に行かせました。母は動かせない状態にあり、訪

問看護に来ていた看護師さんは入院するよう言いましたが、母本人が入院したくないと言うので、私は母と2人の生活で在宅看護をし、東京で3～4週間を過ごしました。私がそこで考えたのは、東日本大震災の被害が起こっているのは福島・岩手・宮城の3県、それに福島第一原発の当事者も福島の方々ですが、福島にいない人間の当事者性も同時に問われるということです。私は東京で末期がんの母を抱えて生きていて、福島に行くことも復興支援に関わることもできない。しかし東京の当事者として何ができるのかを考えざるを得ませんでした。今日はそういうことを話したいと思っています。私の中には、何で日本はこういうふうになってしまったのかという憤りがあります。

とはいえ、私自身はそんなにシリアス一辺倒な人間ではありません。多くの人たちから私は「癒し」という言葉をつくった人として認知されています。スリランカの悪魔祓いの儀式で病気が治るという現象を紹介するときに、これは「癒し」なんだと言い始めたのが1988年のことです。それまで「癒す」という動詞はあっても「癒し」という名詞は日本語には存在しませんでした。同じように動詞はあったけれど名詞はなかった言葉として、「癒し」の後には「気付き」という言葉もできています。当時の私は、この「癒し」という言葉に世直しの意味を込めていました。こんなに人々が癒されない日本社会をどうすべきなのかという提言のつもりでした。

しかし、「癒し」の意味はどんどん矮小化されていき、「癒しは卑しい」という批判も出ました。社会全体の構造を変えなくても、何とかセラピーやヒーリングで個人が癒していけば良い、という考え方になってしまうと、社会がどんなに酷くなっても私たちは癒しグッズで癒せばいい、癒すのは各自の自己責任という話になってしまいます。日本が無茶苦茶なことになって、人々にかかるストレスの量は高まっているにもかかわらず、それを癒すのは各自の自己責任だと人に丸投げする「癒し」とは一体どうなのでしょう。社会のひずみが大きくなって人を人と思わないように追い込んでいき、心理



カウンセラーや精神科医がそれで稼いで儲ける社会はどうか。もっと社会が悪くなれば良いと思っているカウンセラーも精神科医もいないとは思いますが、本来、人が良い方向に向かって成長していく中でのカウンセリングや精神科医療であると思うのです。我々の業界が儲かれば良いというものではない。社会が悪くなればなるほど癒しをするお医者さんは儲かるけれど、それは本望ではないわけです。

Ⅱ 『生きる意味』の不在と現代の病—— 『生きる意味』

こうして「癒し」という言葉が使えなくなってきて、私は『生きる意味』（2005、岩波新書）という本を出しました。この本では、私たちの直面している不況とは、経済的な不況である以上に、生きる意味の不況なのだと書きました。本の中で、当時の小泉純一郎総理大臣の構造改革を非常に厳しく批判しております。額に汗することもなく、株で稼いで大もうけして六本木ヒルズの最上階に住むような人間を、一番の成功者だと言ってロールモデルにしてしまう日本社会では、どんな子どもたちが育っていくのか。労働者は儲からない市場から儲かる市場へどんどん転換していけば良い、今まで農業を営んできた人に儲からないから工場へ働きに行けというのが正解なのか。社会とはそういうものではないのではないか。誰も自分を形成してきたかけがえのない職場やその場所があるにも関わらず、これは儲からない業種になったから転換すればいい、労働の流動性を高めていけばいい、これが構造改革だとやっていったら、我々はどうなってってしまうのか。この本は郵政解散選挙の半年前くらいに出しました。当時の日本は小泉さん万歳という雰囲気、私は非国民であるかのように言われもしました。一方で、この本は大学入試の出題率第一位になっています。ちなみに2位は茂木健一郎、3位は鷲田清一、4位は夏目漱石です。

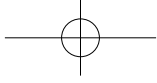
私が言いたいことは、「揺れる社会の不安と空気に向き合う」という早川先生からいただいた題は、まさに東日本大震災の後で揺れている

私たちの不安と空気に向き合うことですが、その不安と空気は東日本大震災と福島第一原発事故だけによって生み出されたものではないということです。東日本大震災や原発事故が起こる前から私たちは相当に揺れていて、相当に追い詰められていました。そこに東日本大震災と原発事故が襲いかかった。ですから、この震災被害や原発事故を復旧しようというとき、単に2010年の日本に戻すというのでは全く解決しません。新しい日本へ、もう一歩踏み出していく意味合いがなければならぬ。年間で自殺者3万人を生み出し続ける日本にもう一回戻していくことが復興なのか、ということをお願いしたいのです。

Ⅲ 「第三の敗戦」時に襲いかかった震災——すでに負けていたのではないかと信頼、安心の喪失～『「肩の荷」をおろして生きる』

東日本大震災の前に上梓した『「肩の荷」をおろして生きる』（2010、PHP新書）という本の中で、いま日本は第三の敗戦に瀕していて、もうすでに負けているという現状認識から出発しなくてはいけないのではないかと書きました。「第三の敗戦」は堺屋太一先生も仰っていることです。堺屋先生が指す3つの敗戦とは、第一の敗戦が明治維新・黒船来襲、第二の敗戦が第二次世界大戦、第三の敗戦が東日本大震災です。私の場合、第一の敗戦は第二次世界大戦の敗戦で、これは軍事的な敗北です。その後、日本はまさに絆の力を結集し、忍耐力をもってみんなで頑張り、1980代後半には「Japan as No.1」と言われるような経済的勝利を収めました。しかし数年後にはバブルがはじけて、第二の敗戦である経済的な敗戦を経験した。そして、その後の舵取りが良くなかったために、2005～2006年頃には第三の敗戦を迎えた。それは安心・信頼の喪失です。

このとき非常に象徴的な出来事がありました。当時の首相の小泉総一郎が小泉チルドレンに向かって「世間では使い捨てという言葉が流行っているようだが、お前たち議員も使い捨て



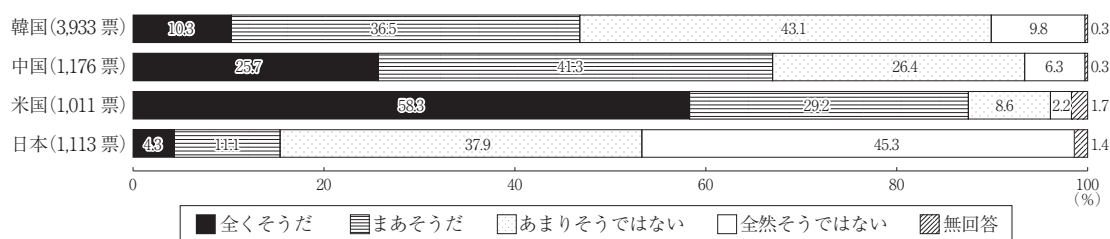
だ。票が集まって議員である間は使える人間だが、ひとたび選挙に落ちてしまえば使えない人間になるのだから、自覚を持って頑張れ」と言ったのです。これはある意味では実に正しい発言でした。小泉チルドレンはほとんどの人がその後の選挙で落選して使い捨てになっています。その後の首相も全部使い捨てになりました。しかし小泉さんが「世間では使い捨てという言葉が流行っているようだが」と言ったことに対して、私は非常に頭にきました。なぜ使い捨てという言葉が世間で流行っているのか。きちんとしたセーフティーネットが張られていないからではないか。それを一国の首相が口に出してそう言うのはしゃれにならない。物を使い捨てにするのですらもったいないことで良くありませんが、人に対して使い捨てという言葉が当たり前のように使われている日本とは一体何なのか、と頭にきたわけです。その後、私がある新聞社の人と話したときに聞いた話では、その使い捨て発言があった1週間後くらいに世論調査が行われて、まさに使い捨てになっているワーキングプアと言われる人たち、非正規雇用にしかならない若者たちの間で、小泉さんの支持率が大きく上がったそうです。彼らにしてみれば、全ての人間が使い捨てだということをあの人は言ってくれた。俺たち使い捨ての人間のことをよく見てくれている。社長も使い捨て、部長も使い捨て、議員も大臣も使い捨て、全て人間は使い捨てだ、と言ってくれた、小泉さんは偉い、というわけです。

また東工大で私が行っている一般教養の授業で、こういうことを小泉さんが言って支持率が上がったみたいだが、人間は使い捨てだと思うかどうか。そう思う人は手を挙げて、と200人くらいの学生に問いかけたところ、100人くらいが手を挙げました。昔から「癒し」とか「人間性の回復」とか言って仕事をしてきた私の学生の100人が手を挙げたことにがっかりしてしまいました。この学生たちはこのままでどうするのだろう。いずれ親になって子どもが生まれたときに「お前が生まれてきてうれしい。お前は使い捨てとして生まれてきたんだ」と言うの

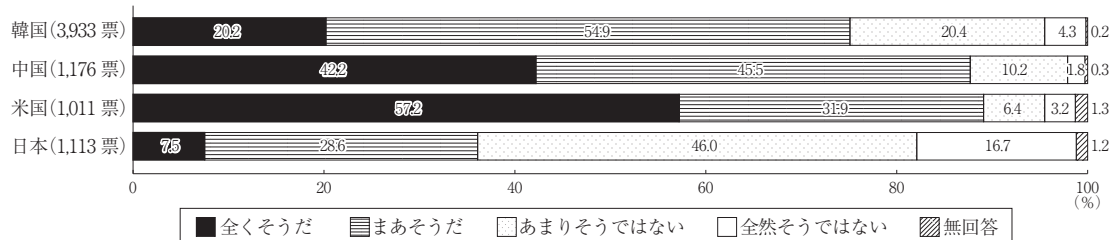
か。あるいは高校の教師になって、卒業式で生徒に「みなさんは社会人として世に出て行くわけだが使い捨ての自覚を持って頑張ってください」と言うのか。そんな社会は終わっているでしょう。自分が使い捨てと思っている人は自分に対しての自己信頼感も低いですし、彼らが他者の喜びを喜ぶ利他的な人になるのか、それとも他者の失敗をざまあみろとネット掲示板に書くような、成功者に落ちてこい落ちてこいというような若者になるかは、火を見るより明らかです。お前もとうとう落ちてきたか、ざまあみろ。こうして平等性が確保される社会です。我々は貧しい日本から立ち上がり、人間の尊厳のあるところで横並びになる、なおかつ個性のある人を育てていくことが使命ではなかったのか。使い捨てで平等な社会、もうこれは第三の敗戦と言ってもいいのではないかと思いますのです。

これに加えて先日、さらに衝撃的なデータを見る機会がありました。『「自殺社会」から「生き心地の良い社会へ」』（2010、講談社文庫）を対談して共著で出版した、親友である清水康之さんという方がいます。彼は自殺防止ネットワーク・ライフリンクの代表です。彼が主催するシンポジウムに参加したとき、ある調査の結果を知りました。「高校生の心と体の健康に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較」（財団法人一ツ橋文芸教育振興協会、財団法人日本青少年研究所：2011年3月）というものです。2010年6月～10月にかけて、日本・アメリカ・中国・韓国の高校生を対象に質問紙調査を行いました。日本の高校生の自己評価はこれらの国の中で格段に低いものでした。「自分が優秀だと思う」という項目に「全くそうだ」「まあそうだ」と回答した割合が15.4%、「私は価値のある人間だと思う」が36.0%、「私は自分に満足している」が24.7%、「私は先生に優秀だと認められている」が17%前後、「親は私が優秀だと思っている」が32%程度です。この結果（図1）を見て、愕然としませんか？何かのバイアスがあったのではないか、他の国と質問の訳語が違っていたのではないかと思います。私たちは、自分が価値のある

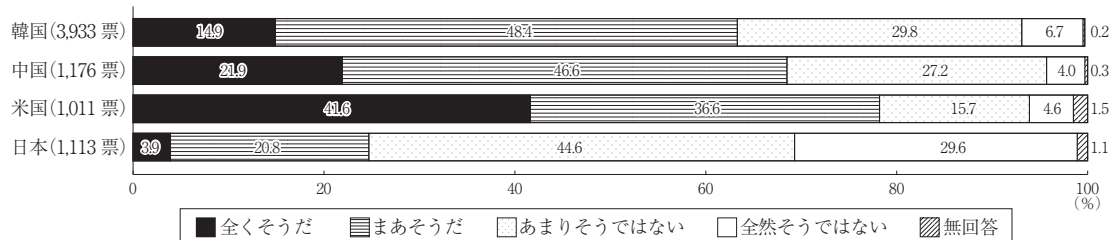
自分が優秀だと思う



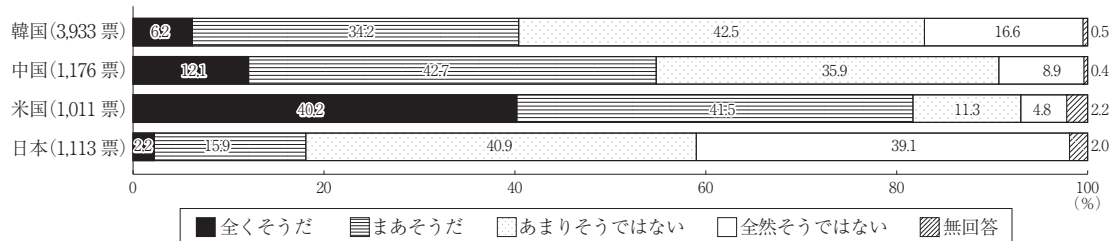
私は価値のある人間だと思う



私は自分に満足している



私は先生に優秀だと認められている



親は私が優秀だと思っている

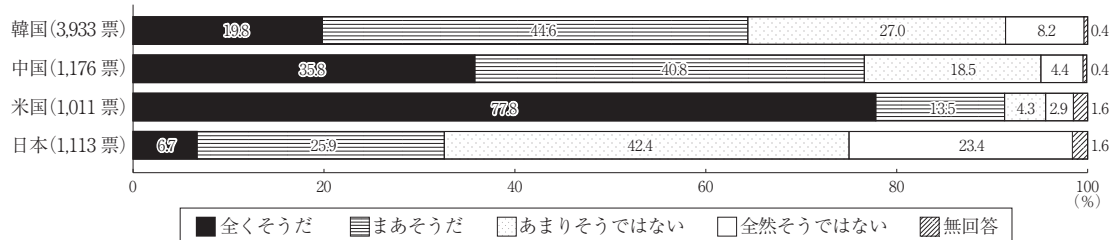
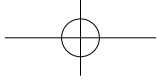


図 1 財団法人日本青少年研究所「高校生の心と体の健康に関する調査—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」(2011 年 2 月)における自己評価, 親や教師との関係の結果



人間だと思わない子どもたちを、これだけ育ててきてしまったのです。

私は日本仏教の再興運動にも関わっています。日本には76,000ものお寺があるのに、なぜこうした人の苦しみに寄り添わないで葬式ばかりやっているのか。全国にコンビニの2倍の数あるお寺が、より人々の苦しみに向かい合うように、変わっていったほしい。日本の仏教の世界では、若手のお坊さんが年長のお坊さんに意見を言えない権威主義なところがあるため、私は若手のお坊さんだけを集めてこれからの仏教を語り合う「ポーズ・ビー・アンビシャス!!」という催しを開いてきました。しかし、住職研修会をやる中で、「わけの分からない若者が出てきて困るとるんですわ。そんな若者にも仏法を説かなければいけない我々の苦しさを分かってもらえますか」と、自分が被害者のような言い方をされる方が出てくる。しかしそれは若者の責任じゃありません。彼らは我々という大人を見てそうなったのです。日本社会の全体として我々年長世代がどういう姿を見せてきたのか、その責任が問われるべきです。カウンセラーも同じことで、クライアントの質が低下しているとか、言う方がいます。でも我々は被害者ではない。我々がまさにそういう日本を見せ、そういう若者達を生みだしてきたのです。

この調査のデータを見る限りでは、日本では親も教師も子どもを優秀だと言わない。「優秀」の内容も他の国ではもっと多様なのでしょう。アメリカでは学校の成績だけではなく、ギターの演奏が上手いとか、絵を描くのが上手いとか、多元的な価値観で「君はこういう素晴らしいところがあるね」と褒めますよね。翻って日本の場合はどうか。私は以前、愛媛大学に教員として勤務していましたが、あの辺りの地域では松山東高、松山南高、松山西高（2008年に閉校）、松山北高と県立高校が4校ありました。この中では松山東高が偏差値の1位で、松山東高に行っていればその生徒は優秀という評価になります。他の学校になるとだんだん偏差値が落ちていく。つまり、その学校に通っていることがプレースメント、その人の優秀さを決める尺度

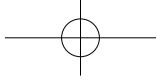
になる。一方で、松山東高の生徒も、自分は東大に行けないから優秀じゃないと言うし、東大から（当時の）通産省に入った人でも自分は（当時の）大蔵省に入れなかったからエリートじゃないと言う。このように、自分が自分を優秀だと思うことを肯定できないのです。これはどう考えても人を不幸にしていくシステムです。それでも、景気の良い社会なら回っていきます。ところが、私は優秀ではない、人は私のことを優秀だと思わない、そういう状況の中で景気が悪くなればリストラに遭い解雇されます。景気という外で支えるものがなくなったとき、内で支えるものもない。

人々が第三の敗戦に瀕しているとき、苦しんでいる人をその苦しみの元である社会に押し込むことが、精神衛生や癒しの役割なのでしょう。何が悲しくて我々はこんな世の中にしてしまったのか。自分は使い捨てだと認識するとき、誰も助けてくれないということですから、安心や信頼が揺らいでいます。そこに先般の東日本大震災と原発事故が起こったのだと考えています。

Ⅳ 天災（地震・津波）：被害者の徹底的救済が「救いのイメージ」を回復救われるのは被災者だけでなく、国民全体、子どもたち

『慈悲の怒り』の中で私は、まず天災の部分と人災の部分ははっきり分けるべきだと主張しています。当時の私たちの混乱は両者が区別されておらずぐちゃぐちゃであるところから来ていました。しかし天災の部分、地震や津波による被害と、人災つまり原発事故に関しては、きちんと区別しなければいけない。そして天災に関しては被災者を助けることを徹底的にやるべきです。

今の日本は、この社会の中で自分が使い捨てになったとき、誰も助けてくれないというイメージに覆い尽くされています。第三の敗戦では、社会が安心して暮らせるものであるとか、あるいは人生でどんなに苦しいことが降りかかってもこの社会には救いの力があり、人的なものであれイメージ的なものであれ宗教であれ



経済であれ、何かが起動してこのコミュニティで救われていくという確信が失われています。それはある意味で、社会イメージの敗戦でもあるわけです。

ですから、今こそ人はどんな苦境に陥っても、それを助ける隣人がいるのだということを示さなければいけない。人を価値のあるものだと思う、人を徹底して助ける、という姿を見て育っていく子どもたちは救われます。私たちのように20年後には無縁社会になって自分が死ぬのじゃないかと思う中年も救われる。人が苦しんでいるときに徹底的に助けられる、それは苦しんでいる人だけでなく、それを見ている周りの大人も子どもも助けられるのです。人が人を救うことで、それを見ている人も救われる。そうして社会の信頼や安心感が回復するのです。そしてみなさんよくご存知のように、人を救う行為の中で、救う側の人たちが救われていることがあります。私のゼミでも、ある学生の友人が生きる元気がなくなって大学に出られなくなっていたけれど、ボランティアで養護施設に行き始めたら、子どもたちに「おにいちゃん、次はいつ来るの」と言われて、「また来週来るよ」と言ったら「待ってるからね」と言われたことに救われた、という話をしていました。自分は誰かに必要とされているんだ、その実感が非常に大きな経験となったのでしょうか。私も講演をすることで救われていることがあります。もとが自堕落な人間なので、こうやって講演させていただくことで、自分に渴を入れて、逆に私の人生が支えられているのです。ですから、とにかく天災による被害者は徹底して救っていく、自分の取り分が減っても救っていく意志を持つということです。

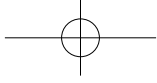
V 人災（原発事故）：その原因の徹底的究明——「第一の敗戦」との類似 猪瀬直樹『昭和16年夏の敗戦』、 丸山真男『軍国支配者の精神形態』

次に人災、原発事故です。福島第一原発の事故は、どう考えてもあそこに非常用電源があればあそこまでにはならなかった。しかも、これ

は後から知ったことですが、この問題は震災以前に国会で指摘されていたことでした。けれども指摘されたことが直らない。意図的に無視し続けられていたわけです。

先々月、パリの国際会議（Risk after Fukushima Crises, Disasters and Governance, 17-18 September 2012, Disaster Evacuation and Risk Perception in Democracies）で日本の安全神話について発表させていただきましたが、その中で会場がシーンとなった部分がありました。日本の原発には一つもベントフィルターが設置されていないことを話したときです。ヨーロッパの原発はベントの排出口にフィルターがついていて、放射性物質を回収できるようになっています。チェルノブイリの原発事故が起こったとき、ヨーロッパの原子力関係者が、こんなむちゃくちゃな事故が起こってしまうのだと目の当たりにし、その後に急いで工事を行ったのです。安全だと思われていた原発でもベントを使わなくてはならないときは来る。そこでフィルターがなければとんでもないことになる。これが最終的に放射性物質を外に出さない最後の砦だ、ということで急いで付けたのです。フランスではチェルノブイリの事故から3年で全ての原発にフィルターを付けました。しかし日本では、そういう海外の動きは当然に知っていて、でも付けなかった。何故なのか？ 私が原子力発電所を造っている技術者に訊いたところ、「原発は100%安全だと言っているのに、ベントフィルターを付けることはそれを使うような事態が起こる可能性があることを人々に知らしめることになり、追求されるのが怖かったから、付けられなかった」と答えたのです。今の原発には構造的な欠点があることをみんなに知られるのが怖くて付けなかった。パリじゃなくても、日本の誰でも、この話を聞いたらフリーズすることでしょう。

原発本体に比べればフィルターは安いです。もちろん日本の技術者は皆、欧州でベントフィルターを急いで装備する工事をしていることを知っている。それでもなお付けない。つまり彼らにとっては、ある種の評価、世間の目が怖かつ



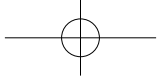
たということです。原発の「安全神話」を何としても死守したかった。守りたかったのは本当の安全性ではなく、人々の評価だったのです。この背景には、日本の反原発運動と原発推進運動とが、100%安全か100%危険かという両極端で不毛な議論をして、擦り合わせをしてこなかった経緯もあります。しかし、原発の設置者である原子力安全保安院や電力会社は、ヨーロッパで全ての原発にベントフィルターを付けていたときに日本でそうしなかった点で、明らかな過失があります。それを考えなくてはならない。東大・京大・東工大といった大学院を出た工学者であれば、これはやばいと分かります。でも言えない。フランスでは「どうしてこんなことになるのか」と訊かれました。私はそのとき、日本は豊かな国だけれども、実は人々が肩の荷を背負わされている社会なのだと答えました。自由にものを言える、言論の自由はあるが、みんなが空気を読みながら言いたいことを言わない、この社会が、福島第一原発事故をもたらしたのではないか。そのことだけでも言いたいと思って『慈悲の怒り』を書きました。

これは今に始まったことではなくて、私が第一の敗戦と呼んでいる第二次世界大戦に日本が突入していった構造と同じです。猪瀬直樹（現東京都知事）が『昭和16年夏の敗戦』という本を出しています。『慈悲の怒り』でも彼の著書を引用していますが、彼曰く、日本は昭和16年の夏には負けていたといっています。昭和16年は12月に真珠湾を攻めて日米開戦となった年です。それから3年半の大戦で300万人の日本人が亡くなりました。しかし猪瀬氏によれば、開戦前の昭和16年夏には、日本は負けることが分かっていたということです。前年の昭和15年に当時の日本内閣は、日米開戦が不可避になってきたことを感じ、内閣総力戦研究所を設立しています。日米開戦で総力戦になったときに何が起こるかを調べる研究所です。各省庁から30歳くらいの優秀な者を2名ずつ、また民間の新聞社などからも人材を集め、計30名程度を集結して、日米開戦になったらどのようなようになるかを調べさせ、綿密なシミュレーションを実行させました。

シミュレーションの結果では、まず米国から日本に石油が入ってこなくなり、どこかに取りに行かなくてはなりません。石油が取れる場所で日本から一番近いのはオランダ領のインドネシアです。まずそこを攻める。オランダの軍備はそれほどでもないのですが日本の領土となり、日本は石油を汲み上げます。しかし、日本軍のインドネシアと日本とのシーレーンの防衛は弱いので、石油タンカーを他国に狙われて撃沈され、汲み上げた石油を日本に運ぶことができない。そこから日本は非常な窮乏状態に陥ります。それでもすぐには負けません。戦争は長期化し、多くの戦死者が出て食料も無くなり、凄惨な状態になって、最後はソ連が不可侵条約を破って北から侵攻して日本の敗戦が決定する。後に、絵に描いたように、このシミュレーション通りに日本は負けます。シミュレーション結果に書かれていなかったのは広島と長崎への原爆投下ぐらいです。研究所はこのシミュレーション結果を、近衛首相・東條陸相ら内閣の前で昭和16年8月に発表しました。

東條は「諸君の研究の労を多とするが、これはあくまでも机上の演習でありまして、実際の戦争というものは、君達が考えているような物では無いのであります。日露戦争で、わが大日本帝國は勝てると思わなかった。然し勝ったのであります。あの時も列強による三國干渉で、やむにやまれず帝國は立ち上がったのであります。勝てる戦争だからと思ってやったのではなかった。戦といふものは、計画通りにいかない。意外な事が勝利に繋がっていく。したがって、諸君の考えている事は机上の空論とまでは言わないとしても、あくまでも、その意外の要素といふものを、考慮したものではないのであります。なほ、この机上演習の経緯を、諸君は軽はずみに口外してはならぬということであります」と言いました。

ところが彼は、本当は日本が負けると知っていた。現にその裏で日本はアメリカと戦争を避けるべく外交交渉を行っていたわけですが。しかしその交渉が暗礁に乗り上げ、負けると知っていたし分かっていたけれど、アメリカと開戦



しろという世論が盛り上がっていて、その空気に逆らって止めることができず、300万人が命を落としたのです。

さらに愕然とするのは、政治学者の丸山眞男の『丸山眞男セレクション』の中に収められている「軍国支配者の精神形態」で、A級戦犯たちが東京裁判で証言した内容です。検察官に日独伊三国同盟締結について問われた木戸幸一元内大臣は、「私個人としては、この同盟には反対でありました」と答えました。東郷茂徳元外相も「私の個人的意見は反対でありましたが、すべて物事には成り行きがあります。すなわち前に決まった政策が一旦既成事実になった以上は、これを変えることは甚だ簡単ではありません」と答えます。彼が国会で熱烈な支持演説をしたことを問われると「この際、個人的な感情を公の演説に含ませられる余地はなかったのであります。私は当時の日本の外務大臣としてこういうことを言う、言わなきゃならない地位にあったと申し上げたほうが最も正確だと思います」と答えます。陸軍で大将まで登りつめ、その後首相となった小磯國昭は最初から満州事変にも反対し、日本の政策に反対し続けたのだというので検察官は苛立ってこんなことを言います。

「あなたは1931（昭和6）年の三月事件に反対し、あなたはまた満州事件の勃発を阻止しようとし、またさらにあなたは中国における日本の冒険に反対し、さらにあなたは三国同盟にも反対し、またあなたは米国に対する戦争に突入することに反対を表し、さらにあなたが首相であったときにシナ事件の解決に努めた。けれどもすべてにおいてあなたの努力は見事に粉碎されて、かつあなたの思想及びあなたの希望が実現されることをはばまれてしまったということを述べておりますけれども、もしもあなたはほんとうに良心的にこれらの事件、これらの政策というものに不同意であり、そして実際にこれらに対して反対をしておったならば、なぜあなたは次から次へと政府部内において重要な地位を占めることをあなた自身が受け入れ、そうして自分では一生懸命反対したと言っておられるところの、これらの非常に重要な事項の指導者の一人

とみずからなってしまったのでしょうか」

それに対して小磯はこう答えました。

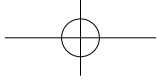
「われわれ日本人の生き方として、自分の意見は意見、議論は議論といたしまして、国策がいやしくも決定せられました以上、われわれはその国策に従って努力するというのがわれわれに課せられた従来の慣習であり、また尊重せらるる生き方であります」

丸山は鋭いことを言っています。「（日本における）『現実』というものは、常に作り出されつつあるものあるいは作り出されてゆくものと考えられないで、作り出されてしまったこと、否、さらにハッキリ言えば、どこからか起こったと考えられていること。『現実的に行動する』ということは、過去への繫縛のなかに生きているということ。現実には常に未来への主体的形成としてでなく、過去から流れてきた盲目的な必然性としてとらえられる」

つまり私がここに存在しているとき、すでにこの現実というものが、私はこの現実に沿って今を生きている。私の現実には未来に向かっての現実ではなくて、過去この場に作り上げられてきたものをただただ盲目的に生きることが日本人の現実なのである。未来への構想、ここでみなさんと一緒に未来を作っていくまいしょう、と未来に伸びていく現実というものが日本にはない。そして個人個人は未来を創造する主体としてではなく、過去へのしがらみの中に生きている。丸山はこう言っているわけです。これは私も非常に分かることがありますし、皆さんも腑に落ちるところがあるのではないのでしょうか。

Ⅵ 日本型無責任体制、「空気」の支配体制をいかに克服するか、同調圧力になぜかように弱いのか

この日本社会に未来はあるかと問うとき、そもそも我々は未来のことを考えて生きているのか？ 常にその場の空気を読みながら、言いたいことを言わずにやっているのではないか。例えば東京電力の清水元社長は、被災者の方々の前で土下座しながら謝っていましたが、その時



役員報酬が半額に減らされても 3,600 万円は彼の手元に残る中で土下座していたわけです。それは実に噴飯ものであるわけですが、しかし誰かがこう言ったら皆さんはどう感じられるでしょうか。「清水さんはほんとうに可愛いそうな社長だねえ。彼以前の社長も国策に従い粛々とやってきて満額の退職金をもらっていたが何の裁きも受けず、たまたま彼が社長のときに地震と津波が起これ、土下座して謝って入院しなくちゃいけなくなったんだから。清水さんが一番可愛いそうな社長だからボーナスもあげていいんじゃないか」と。大枠としてはとんでもない論理なんだけど、しかし清水さん可愛いそうね、というところは何か共感してしまう日本人が多いのではないかな。

何故日本人はこんなに空気というものに弱いのか。権威に弱いのか。なんで自分が主体として物事を言い出せないのか。そこを一緒に考えていかないと、次の時代は到来しないと思うのです。

Ⅶ いじめの隠蔽、事故の隠蔽、病の隠蔽 真に安全な社会とは？「自己責任」 を強要する社会を告発する

ちょっとまた衝撃的なデータをご紹介します。この 10 年くらい、同調圧力や日本社会での内部告発がいかにやりにくいかを解説したビデオを、毎年の授業で学生に見せて、次のような質問をしています。「あなたは本社から東南アジアの会社に派遣され赴任しました。あるとき、会社の化学工場から流れている廃水に、有害な物質が大量に含まれていて、川下でたくさんの方が病気になっていることを知りました。これはまずい、どうにかしなくてはとあなたが上司に報告したところ、上司はこう答えました。それは我々の権限でできることではないし、東京の本社が何かやれと言えはするが、ここで設備投資をしろというのもコストカットが叫ばれる現状から考えると非常に難しいので、騒がれて本社から何かしろと言われるまでそのままにしておこう。そうしてあなたの申し出は却下され、日々毒物が排出されています。では、あなたはどうしますか？」

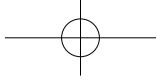
選択肢は「1. 名前を出して知った事実をメディアに伝える」、「2. 名前を出さずにインターネットなどに事実を書き込む」、「3. 何もしない」の 3 つです。2006 年に 200 名のうち半分が自分は使い捨てだと手を挙げていた学生たちは、名前を出して告発すると回答した者が 5 人、名前を出さずに告発するという回答が 15 人、何もしないという者が 180 人でした。日本のエリート中のエリートの理科系の学生たちです。こういう子どもたちを我々は育ててきたんです。彼らのような「優秀な」学生たちが、東京電力や電子力保安院に就職する。福島第一原発は単なる偶発的な事故ではないのです。

Ⅷ 「支えのイメージ」の回復へ

ならばその状況を変革するために、いま何が必要なのでしょう。

今度は少し別の角度から、ある女子学生の話をして。彼女は 20 歳くらいのとき、生きる意味が分からなくなり、夜中に家出をしてしまいました。夜の 1 時頃、とぼとぼ町の方を歩いているとお寺がありました。門を押してみたが、施錠されて閉まっている。インターホンがありました、押したらどうなるか頭をよぎります。「今、何時だと思ってんだ。夜中の 1 時にインターホンを押すなんてどんな迷惑か分かってんのか。だいたいお前はうちの檀家なのか。檀家でもないなら関係ない寺のインターホン押すなんて、どんな了見なんだ」と怒られるのではないかと思います、インターホンを押せず、お寺を後にしてまた歩きました。今度は十字架が見えてきます。教会だと思って扉を押すと、なんと扉が開いていたのです。教会は夜も開いているんですね。「どんなときでも教会の扉は開いているように」、と聖書に書いてあると聞きました。彼女は教会の中に入って座り、朝まで 3～4 時間座っていました。すると胸の重いものがすーっと消えていき、家に帰ろうと思ったということです。そして家に帰ったら、ちょっとずつ元気になって、良くなったということです。

この話で残念なのは、彼女がお寺やお坊さんにどれだけ悪いイメージをもっているかという



ことです。どんなときでも、そういう人たちを裏切らないで話を聴くお坊さんを、私は何人も知っています。けれど彼女は、そしておそらく他の多くの学生も、そういうお坊さんには会ったことがない。彼女のもつ悪いイメージは国家的損失でもあると思います。

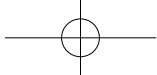
しかし不思議なのは、彼女は誰とも話をしなかったのに回復したことです。誰か、神父さんか牧師さんが出てきて話を聴いて回復したのであれば、カウンセリングで回復したと言えるでしょう。しかしそうではない。理由を彼女に尋ねたところ、「ここ（教会）は夜中も開いてると分かったから、ここで泣き叫んだりすれば誰かが来てくれるだろうと思った。どんな人かは分からないけど、話くらいは聴いてくれるだろう。じゃあ、ここで泣き叫ぼうかと自問自答した。そうしようと思ったら、私にはまだ生きていく力がちょっと残っていると気づいた。今日、泣き叫ばなくても大丈夫だ。だから今日は家に帰ってもう一回やり直してみてもっとひどくなったならここに来よう。もっとひどくなったならここにきて泣き叫ぼう」と思ったそうです。ボロボロになったらあそこに行けばいい思い出したら、ちょっとずつ生きているのが楽しくなったということです。支えというものがこの世の中にはある、ということに彼女は気づいた。そうしたら人生が自由になった。つまり支えと自由はコインの表裏なのだ、というのを私は申し上げたいのです。

私たちはこの、支えがあるという感覚を徹底的に損なわれています。すると人は、今の場所での評価を気にするようになります。この場所の外には助けてくれるものなどないのだから、この場から追放されたらもう人生は終わりです。ですから会社であればノルマを気にして、上司や同僚からどう思われているかを気にするしかありません。学校の中でも、ひたすらクラスメートたちに気に入られ、嫌われないようにひたすら努力をしなくてはなりません。誰でもこの部屋に入ってきたとき、どんなことを言えば変な人と思われないか、後でいろいろ言われないか、気にせざるを得なくなる。それがまさに空気を

読まなくてはいけないということです。

親や友達から価値のある人間だ、優秀だと言われることなく、何か馬鹿なことをすればますます馬鹿だと思われ、ますます価値のない人間だと思われるという不安を抱え、変な人だと見られないようにするためにはどうしたらいいか、とがんじがらめになっていく。ここにいる人たちにどのように思われようが、どこかに私を支えてくれる人が、そして神や仏がいると思えば、思い切ったことが言えます。他に支えとなるものがあれば、1つのコミュニティの中でそんなにビクビクしなくてもいいのですが、その支えがない。彼女は、親や教員や友人がいろいろなことを言って彼らにどう思われるか気になっていたけれど、ボロボロになったらあそこに行けばいいというブレイクスルーがあって元気になりました。私はそのことを声を大にして言いたいのです。

これまでの日本社会はどこにその支えがあったのかというと、経済が好調のときは日本社会の神や仏は会社にありました。絶対に裏切らず、入った途端にみんな仲間だからです。運動会も一緒、飲みに行くのも一緒、住むところも社宅。絶対この人たちは仲間だという意識があり、よほどの不祥事がなければそこから出て行かなくていい。だからその時代は、先ほどの彼女にとっての教会のような場所は必要とされなかった。しかし今や勤め先は支えとならず、支えは自己責任となっています。先日、会社の人事関係者が集まる場で講演をしました。人事関係者も現状に泣きそうになっています。ある会社では600人もの人が心理的にまいってしまい会社に来られなくなっているといえます。そのことが会社の雰囲気を悪化させ、出勤できている人たちも自分もいつかそうなるのでは、と疑心暗鬼になる。そして人事の人たちは「600人の休職者をどうにかしろ」と言われるのですが、彼らにもどうしようもありません。心優しい人事担当者は、どうしたらいいのかと頭を悩ませ、次のうつ病候補になってしまいます。その人達に「ひとりひとりの心の支えは宗教の役割で、宗教者がそういうときに人々を救ってくれたら、皆



さんは楽になりますよね」と言う、皆さんほんとに大きく頷くわけです。そこまで日本社会は追いつめられているのです。宗教であれ、カウンセラーであれ、地域社会であれ、趣味のサークルであれ、この日本社会の中にあるどんな支えでも全て使いきらなければ、総動員しなければ、もうやっていけない時代になっているのではないか。親でも教師でもカウンセラーでも宗教者でもコミュニティでも、全部総動員していかないといけない時代に入っているのです。

IX まなざしの地獄——病むことによる回復のシステムはあるか『スリランカの悪魔祓い』

私にとって 20 代にフィールドワークを行った『スリランカの悪魔祓い』は今でも癒しを考える原点になっています。例えばある家のお父さんが病気になって、病院に行っても治らないと悪魔祓いをしてもらいます。それは村人が 200 人くらい集まって徹夜で踊ったり歌ったり太鼓を鳴らしたり、悪魔と交渉したり、お祓いしたり、最後はこの本に出てくるようにお面をかぶった悪魔が出てきて下ネタ・ギャグ・替え歌などで村中 200 人くらいがワーッと笑う中で悪魔が去っていく。そこで面白いのは、どんな人に悪魔が憑くのかと村人に訊くと、孤独な人に悪魔が憑く、孤独な人に悪魔の眼差しが来ると答えることです。

翻って日本では、我々の眼差しは一体どうか。町の中を歩いているとき、あなたは生きていていい、我々と一緒に生きていく仲間なんだという眼差しを感じるでしょうか。お前なんていてもいなくても同じだよ、誰もお前のことなんか見てないし、お前の幸せなんて誰も望んでないよという眼差しでしょうか。あるいは、早く落ちてこい、お前も使い捨てなんだよ、成功してるからっていい気になってんじゃねーよ、お前もそろそろ落ち時だよ。という目線か。眼差しの質が非常に悪くなっていると私は思います。それが最悪な形で現われたのが、2008 年に秋葉原で起きた殺傷事件です。人手が足りないと言われれば呼ばれ、人手が足りていると言われれば雇用を切られる。俺なん

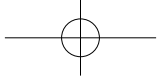
か生きていたって誰も喜ばないし、死んだって誰も悲しまない。それが俺だ、という青年が事件を起こしたのです。

スリランカの場合、一回一回の悪魔祓いによって癒されるのは患者さんだけではありません。このコミュニティでは子どもたちも小さいときから悪魔祓いを見てきて、近所のお姉ちゃんが孤独に陥って人生のピンチに陥ったら悪魔憑きになっちゃった、そうすると村人みんながやってきて悪魔祓いをやってくれて、お姉ちゃんも回復するんだという過程を何回も見て育ち、その「救い」のプロセスが無意識にインストールされているわけです。病んだお姉ちゃんのためのワンマンショーでこんなに人々が集まってきて楽しい悪魔祓いをやって、回復していくのを見て育つ。すると子どもたちは、自分が人生のピンチに陥ったときに、ちゃんと悪魔憑きの子どもになります。無意識的にそうなる。悪魔祓いをやるから癒されるのではなくて、ピンチのときにちゃんと悪魔憑きになる。病むべきときには病む、苦しいときには苦しいと言う、ということが必要なのです。

では日本の場合、人が病んだとき苦しいとき、何が起こるか。子どもたちが見ているのは、リストカットをする、ひきこもるといった行動です。私が憂慮しているのは、スリランカの悪魔祓いを見て育った子どものように、日本の子どもたちがテレビのニュースを見て育ち、「人々は病んだときに誰でもいいから殺したくなる、人間は追い詰められるとそうなる」、とってしまうのではないかということです。私たちはこの社会の中で、病んだときに病んでもいい、病むということ・苦しいと声を上げることは癒しへの道であり救いへの道であり、私を救うことにもなるし、救っている人を救うことにもなるし、社会全体が救われていくことにもなる、というメッセージを回復しない限り、揺れる社会に浮かんだこの空気は解消されないのではないかと思います。

X 「精神衛生」は未来を作りだせるか

先般、親鸞の血を引く浄土真宗本願寺派第 24



世門主・大谷光真氏と対談をしました。(『今、ここに生きる仏教』2010, 平凡社) 私は浄土真宗の人が若者に、自分は至らない凡夫であり、南無阿弥陀仏を唱えて阿弥陀様に救われなければいけないと言うと、若者はますます自分では何もできないと、無力感をあおるのではないかと質問しました。大谷氏は「たとえ話ですが、あまり馴染みのない町の人ごみを一人で歩いていると、人はいっぱいいるけれど全く孤独というかある種の緊張があつて身構えてしまいますよね。しかし、突然私の名前を呼ぶ声がどこからか聞こえて、ぱっと見たら友達だった。あんたどうしてここに來たのといわれたら、急に表情が和らいだ。道に迷ったり、正しい道を探しているときに、突然知っている人が現れてあなたどうしたの、と。もうそれだけで緊張がほぐれてほっとする。これは例えですけど、人生に迷って身構えている、どんな恐ろしいことがあるのかと右往左往している人生で、向こうからふつと私の名前を呼ぶ人が現れて、心配しないでいいよと安堵感を与えてくれる。それだけではないと思いますが、阿弥陀様に出会うということにはそういう面もあるんじゃないかと。それはこの人生をさまよう若者を支える力になるんじゃないかという風にも思うのです」と答えました。阿弥陀様は本願にいて、苦しんでいる人を何としてでも救いたいと決意している存在です。どんなに苦しくても阿弥陀様が救ってくれるという光を信じることができれば、それが支えとなるのではないかと、言っているわけです。

私は大谷氏にさらに質問をしました。報恩感謝という言葉があります。恩に報いて感謝しなさいという意味で、浄土真宗では骨を砕いて、身を粉にして感謝しなさいと言うのです。親鸞聖人の『正信偈』の中に

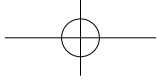
「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」
という詩がありますが、これは一体どういう意味なのかとお尋ねしました。大谷氏はこのように答えました。

「阿弥陀様に救われて仏になる、という救いをいただいていることですね。それに対して報

じるといっても、阿弥陀様に全くお返しをするということとはできないというか、返してもしょうがない。ですからその方向を変えて世の中に向かって自分のできることを精一杯する。第一義的には阿弥陀様に救われたという浄土真宗を今度は周りに伝えていくということだと思いますが、必ずしもそこにとどまらなくて、社会的な活動でもなんでも自分がいいと思ったことをする。自分の利益ではない、取引としても私事ではないところに働きかける。私が味わっているというか、受け取っているのはそういうことです。何かを受け取ったらその人に返すという往復運動では、横にも将来にもつながらないですよ。実際、阿弥陀様に向かってありがとうというのは大事なことです。それをおろそかにしてはいけないと思いますが、そのことは身を粉にしても報すべきだとは私には感じられない。やはり自分の心身を働かせて、この世あるいは次の世代に働きかけるということが大切なのではないのでしょうか」

大谷氏は、文化人類学にもそういう理論がありますよね、と指摘されました。クロード・レヴィ＝ストロースというフランスの高名な文化人類学者がいます。彼は社会的交換理論を提唱し、交換を「限定交換」と「一般交換」という2つの概念に分けています。限定交換とは、私が相手から何かをもらい、相手に何かを返す、という私と相手との間での限定的な交換です。一方、私が相手から何かをもらい、私が相手に返すのではなく別の人に返すことを、一般交換といいます。レヴィ＝ストロースは親族の基本構造について、お嫁さんを限定交換している社会よりも、あるところからお嫁さんをもらい、今度は自分たちから別のところへお嫁さんを出すことをグルグルとやっている一般交換の社会の方が、安定性が高いと述べています。阿弥陀様からもらって阿弥陀様にありがとうと言っても関係性は広がらない。阿弥陀様からもらったものを誰かにあげる。そうしないで、1対1の閉じた関係で交換しているから宗教はだめになるのだ、と大谷師は主張しているのです。

私はここで、「精神衛生」はどのようなだろう



と思いました。カウンセリングは1対1の関係の中で、どういう風にするかを考える、閉じたものだと思います。しかし、未来に向かうときには、その未来に向かう大きな流れがあり、この人からいただいたものをこっちに返していく、この人がまたこっちに行く、という開かれたエネルギーのあり方を確立していかなければいけないのではないかと。1対1の中での精神衛生だけでなく、もう一つの大きな世界の流れを感じていかなければ、この日本社会の再建はありえないのではないかと、私には思えます。

XI 「慈悲の怒り」(ダライ・ラマ)——建設的な怒りをいかに持てるか

最後にダライ・ラマの話をしたと思います。ダライ・ラマとの2日にわたる対談を行いました(『目覚めよ仏教!—ダライ・ラマとの対話』2007, NHK ブックス)(『ダライ・ラマとの対話』2010, 講談社文庫)。1日1時間を2日のはずが結果的には5時間にもおよびましたが、その理由は本を読んでいただければ分かります。対談の途中で私が怒りの話を出しました。怒りを鎮めるのが仏教だと言うけれど、私は社会的不正やいろいろな差別などを見ているともう腹が立って、社会への怒りは鎮まらない。それを仏教徒の方に話すと、そんなことで腹を立てているようでは修行が足りません、と言われてしまうのです。では修行が足りて、人が殺されていようが苦しんでいようが、にこにこ微笑んでいるのが仏教の仕事なのか。私の問いに、ダライ・ラマは答えました。仏教の根底には慈悲という心があるのだから、社会的問題に無関心ということはありません、怒りを持つことは大切なことです。ただ小さなことで怒るのは良くありません。大悲の心、大きな怒りの心というものを持ち続けなければならない。慈悲があればこそ、怒るべきときには怒らなくてはならないのです。

日本社会は、コミュニティの中でみんながよい顔しすぎです。本当に大きく間違っていることには、慈悲があればこそ、ちゃんと怒らなければならない。逆に言えば、怒りを持つためには、その人は支えられていなくてはなりません。

この場以外に自分を支えてくれるところはないと思っているから、どんな不正にも空気を読むばかりで怒れないのです。大きな支えが私にはあるから、ここで怒ってちょっとぐらい嫌われても大丈夫だ、というものが持てるかどうか。

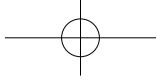
XII 「よき種」をまく人生——「将来世代」への責務を自任しながら生きる

最後にもう一つダライ・ラマの話です。あるアメリカの大学で4,000人くらいの学生を相手に、ダライ・ラマが講演をしました。とても面白くて、ユーモアもあり、聞いている人がエンパワーされる講演です。その最後に、学生が手を挙げてこんな質問をしました。

道に惑っている僕たちを何であなたはここまで元気にしてくれるのか。だってあなたは50年前に中国に攻められて植民地となって、王様だったのに生まれ故郷のチベットに帰ることもできない。この50年間で120万人のチベット人が人権問題で殺されている。となればあなたは最も不幸な人で、最も絶望して死にたくなるような人であるはずなのに、なんでそんなジョークも言えるし、そんなに元気で幸せそうなんですか。

さすがのアメリカ人もその場でシーンとなりました。そういう苦しい思いをした人がこうやって講演しているのに、何でその学生はそんなことを訊くのか。でもダライ・ラマは次のように答えました。

「今日の講演でも話したように、仏教の根本には縁起という教えがあります。それは全てのものが関係性の中にあるということで、全てのどんな一つのものも単独では存在しないという関係性の教えです。ですから、物事の因果関係も一つのものが起こっているのは一つのももの原因がある。私もあなたたちがいるからこうやって講演をさせていただいているという因果関係を示しているということですよ。さて、50年前のチベットを考えて見ますと、わたしたち政治家やお坊さんたちはチベットのことしか考えてなくて、チベット人さえ幸せであればいいと思っていて、お坊さんはチベット仏



教をひたすらチベット人だけに説き、政治家はチベット人のことだけを考えればいいと思ってやっていた。世界の他の国のことには全く興味がなかったわけです。そこに中国が攻めてきて弾圧され、植民地となって、助けてくれと言ってもどこの国もチベットのことなどどうでもいいと助けてくれなかった。それで追放されてチベットの外に出た。そこではじめて、我々チベット仏教の教えが、20世紀の人々が苦しんでいる執着であるとか、理不尽さであるとか、そういった苦しみに対してどれだけ役に立つのかと言うことが対話の中で明らかになってきたのです。そして私たちはそれならば世界のお役に立てるのではないかなと思って、どんどん発信していき、ノーベル平和賞をいただくこともできた。つまり私たちは良き種も蒔けるし、悪き種も蒔ける。悪き種を蒔いていたり慢心していたりすれば、やはり悪い結果をもたらしていくのです。もちろん中国が侵攻してきたというのは悪いのですが、あの時私たちが慢心していたということは、ある意味では悪き種を蒔いていたということにもなる。

しかしながら良き種を蒔いていれば、必ずやそれはいつか分からないけどその種は芽を出し、そして花を咲かせることになるでしょう。こうやって講演をし、これだけ多くの皆さんと出会えたという良き種を撒いたといっても、チベットが私の目の黒いうちに解放されるかどうかは分かりません。だけど私は毎日良き種を蒔きたいと思っています。そして今日講演をしたらあなたがそこで立てこんなに素晴らしい質問をしてくれた。それは、あなたはこの場においてたいへん良き種を蒔いたし、私はあなたとこうやって知り合えたということで今日良き種を蒔けたということをすごくうれしく思う。だからどんな絶望的な中でも今日この良き種を蒔いてそれが育っていくなということを考えると、私はこんなに幸せ100%でいられるんですよ」

私はこの話を聞いて号泣しそうになりました。なぜ日本にはこういうことを言ってくれる人がいないのか。あなたはどの程度の成績で、どの大学に受かった程度の人間だとか、人間を相対

的にし、まさに丸山真男も言うように、過去にしがみつかせる現実のことは言うけれども、今日良き種を蒔いて未来を作り上げていく、その今日を喜ぶ、未来を喜ぶという、未来を創り出す主体のことを、なんで日本人は誰も言ってくれないのだろうか。過去へのしがらみではなくて、未来に向けてエネルギーを投射していくということです。まさに揺れる社会と不安、揺れすぎるからこそここで問われるのは、未来に対してどのような種が蒔かれていくかということです。そのときに日本の社会の中での本当の信頼をいかに回復していくかということなのです。

先ほどのシンポジウムの最後の話とやはりつながります。私もようやく子どもの手が離れたので、警戒が解かれた南相馬市小高地区の惨状を見てきました。小高病院の元院長の遠藤医師が仮設住宅の真ん中でやっている絆診療所で、お話をさせていただきました。その状況はたしかにとてつもなく苦しいことで、私もその惨状を見たとき、悔いを感じました。私たちは原発というものを作り、(その危険性を私の知り合いは指摘していたけれど)事故なんて起こるわけない、それよりも自分が生きている間は電気が煌々とついているほうがいい、くらいに思ってきて何も言ってこなかったことを悔いました。しかし後ろで起こったことを悔いながら、前に一歩踏み出す。そのときに、そこの方々と絆を作るということももちろんですけども、大きな意味では東北の人と東北とは関わりのない人とも、日本の中での信頼や安心を回復し、本当の意味での自由で豊かな日本にしていくことが我々に課された今の課題だと思っています。恐らく精神衛生とは、単に病んでいる人を回復させることだけが使命ではありません。今この、第三の敗戦下における精神衛生とは、未来へ良き種を蒔いていく決意が必要なのではないでしょうか。この日本の大きな転換期に、まさに状況に関わり合っている皆さまにお話させていただく機会をいただき、ここで最大のエールを送らせていただき、私の話は終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。